

## 平成 28 年度の国際教養の取り組み

### Initiatives of International Liberal Studies in 2016

2016 年度 国際教養委員会

西村 諭 愛甲修子 古家正暢 佐藤恵美

#### 要旨

本校独自の学習領域「国際教養」は、2012 年度に 1 年～6 年までのすべての学年がそろふこととなり、年度ごとの実践の積み重ねをもとに、開校以来改善や整備を加え、「理数探究」(1 年)、「Pre Personal Project」(3 年)、「Personal Project」(4 年)、「国際 5」(5 年)、「国際 6」(6 年)、「ワークキャンプ (1・3・5 年) の開設・実施やフィールドワークなど、各学年における国際教養の時間の活動は、その運営が安定したものとなりつつあった。しかし、4 年の Personal Project の提出が例年の 1 月から 9 月へと変更となったのに伴い、3 年のワークキャンプおよび Pre Personal Project の位置付けや、5・6 年の国際 5・6 のあり方など、多くの改変を迫られることとなった。

#### 1. はじめに

本校における「国際教養」は「国際社会の中で共生・共存する力を育成する」ために設定された学習領域である。「国際教養」には「情報」(前期課程)や「LE (Learning in English)」(前期課程)、「第 2 外国語」(後期課程)・「GI (Global Issues)」(後期課程)など、教科に委ねられている科目もあるが、「人間理解 (道徳)」(前期課程)や「PP (Personal Project)」など、学年や学校全体で運営する科目 (時間) も含まれている。本校ではこれらの科目・時間が相互に結びつき、他の教科目とも関連しながら、生徒一人一人が豊かな教養や学力を身に着けることを目標にしている。

2016 (平成 28) 年度は開校 10 年目を迎え、一つの節目を迎える年となった。その節目となった今年度は、この「国際教養」が、生徒にとって、6 年間の集大成としてどのような形でこれまでの学びをまとめるかを検討しつつ進めることとなった。結果としては非常に難しい課題を抱えることとなったが、それらを含め本校の学びの中核をなす「国際教養」の 6 年間のつながりと継続をどのように構成するかが課題となった年である。本号では従来の「国際教養」との変更点を報告し、それぞれの課題と成果を示しておくこととする。

#### 2. 第 4 学年パーソナルプロジェクト (「国際 4」) について

パーソナルプロジェクトは名称を見る限り、これまで行われてきた「課題研究」「個人研究」「卒業研究」と類似した取り組みであるような印象を与えるが、個々の生徒が課題を設定して探究を推し進めるプロジェクト型の学習活動であり、IB の教育理念・MYP の理念が色濃く見える学習である。一般的にイメージする「個人研究」との違いは、そのためにガイドが用意されることにもみられる。パーソナルプロジェクトについては、IB が独自にガイドを発行しており、目的・指針・評価項目・評価方法が IB によって定められている。本校ではそれらを参考にしながら独自のガイドを作成し、生徒に配布している。生徒は、「調査」「計画」「行動」「振り

返り」のサイクルを実施し、逐次プロセスジャーナルを記録し、最終的にプロジェクトとしての作品、報告レポートを作成し、それを発表する。また、プロジェクトについての振り返り（取り組み後だけでなく取り組みの最中の振り返りも含む）が非常に重視されているのも特徴的である。

このパーソナルプロジェクトは、第4学年における学習活動として設定され、作品の提出期限は、昨年度までは1月末であった。しかし、今年度から変更があり、9月初めに提出となった。この変更によって、これまで第3学年において活動していたPPP（Pre Personal Project）のあり方や沖縄ワークキャンプの位置付けをはじめ、第5・6学年における「国際5」・「国際6」のあり方など、各学年における国際教養の学習活動の内容変更を余儀なくされたと同時に、国際教養全体のあり方を見直すきっかけとなった。以下、その具体的な変更内容を記す。

従来、第3学年の「国際教養」は、11月に実施する沖縄での現地調査（「沖縄ワークキャンプ」）を含む「PPP」を軸として、進められた。このPPPの目的は、4年次にMYPの集大成として実施するパーソナルプロジェクトの準備段階として、資料の集め方、調査・分析の方法、報告レポートの様式などについて一通り理解することにあつた。また、PPPの目標は、国内ワークキャンプと関連させ、「人間理解」・「国際理解」・「理数探究」の3領域のうち1領域を選び、個人の研究テーマを設定し、パーソナルプロジェクトの方法や形式に沿って取り組み、それらをマスターするものであつた。つまり、3年次の4月から始める、1年間を通しての学習活動であつた。

しかし、パーソナルプロジェクトの提出期限が1月から9月へと前倒しになったのに伴い、必然的にパーソナルプロジェクトの開始時期も早まり、27年度（7回生）は3年次1月からのスタートとなった。その結果として、11月中旬の沖縄ワークキャンプが終わるとすぐにレポートを作成し、4月からのPPPとしての学習を総括し、1月にはパーソナルプロジェクトを開始するという、慌ただしい流れとなった。しかも、生徒個人による本格的な探求活動は、第4学年になってからのスタートとなったため、7回生は実質半年にも満たない探求活動を通してパーソナルプロジェクトを完成させ、作品を提出しなければならない状況とならざるを得なかった。

### 3. 第5・6学年の「国際5」「国際6」について

第5学年は、MYP修了後の学年となる。そのため本校でも文部科学省の教育課程上の「総合的学習の時間」を「国際5」という名称で開設している。ただし、「国際5」は六年一貫の流れを鑑みて設置されたものであり、特に4年次のパーソナルプロジェクトや5年次に行われる海外ワークキャンプとの関係、あるいはその後の6年次の国際教養のあり方との関係性を強く意識しながら運営する必要があつた。まず、開設時のねらいと指針を挙げておきたい。

#### 3.1 第5学年「国際5」

##### (1) 第5学年「国際5」の本校教育課程上の位置づけ

高等学校学習指導要領に示されている「総合的な学習の時間」を第5学年「国際5」として開設する（ちなみに4年次のPPも総合的学習の時間の扱いであり、校内では「国際4」として開設されている）。また「国際5」は1単位とする。

##### (2) 学習内容

- ・生徒一人一人が、第4学年までの学習やパーソナルプロジェクトでの成果等を踏まえ進路を意識しながら、興味関心のある学習領域群（人間理解・国際理解・理数探究）の講座を

選択し、その中で自己の課題を設定する。

- ・各講座において議論することを通して論理的思考に基づく発信力を高めていくとともに、客観的に自己の課題を見直し、問題意識を深めていく。
- ・課題研究の学びの成果を積極的に外部に発信する。…スクールフェスティバル、外部のコンテストなど各学習領域群において、学習領域討論会、中間報告会等の活動を位置づける。年度末には校内にて課題研究発表会（仮称）を実施する。

### (3) 支援体制

- ① 学習領域群（人間理解・国際理解・理数探究）のバランスを踏まえ、専門的な指導を展開できる担当教員を配置する。…4年PPのSVとは異なる
- ② 生徒は3つの学習領域群のいずれかを選択する。それぞれの学習領域群で担当教員が設定したいずれかの講座に属し、担当教員の指導・助言に基づいて自分の課題学習テーマを設定し、1年間継続的に研究に取り組む。
- ③ 外国語での議論（ディスカッション）及び研究のまとめが進められるように外国語科の教員が指導に加わる体制を整える。

### (4) 開設の仕方

- ・それぞれの講座で議論できるような大テーマを設定する。その大テーマに関わる小テーマを各自が設定し、学年末に探究活動のまとめ（論文、作品など）提出する（いずれの場合も英語による要旨を添付）。
- ・生徒の希望する学習領域および仮テーマ（4年次3学期に調査）を参考に、国際教養委員会が担当教員12名のうち各学習領域にそれぞれ何名の担当教員が必要かを定める。
- ・5年学年担任6名を含める。海外フィールドワーク事前・事後の指導に「国際5」の時間を当てられるようにするため。

## 3.2 第6学年「国際6」

### (1) 第6学年「国際6」の本校教育課程上の位置づけ

「国際6」は文部科学省の教育課程上の「総合的学習の時間」に相当する。27年度の企画・運営に関しては、生徒の進路や将来の社会生活への展望を鑑みて学年担任が実質的運営にあたった。内容に関しては、年度当初に過去2年間を振り返り、4回生の現状を踏まえて学年担任で話し合い、昨年度と同様、最終的に「社会への提言」を作成するという目標を教員側で提示し、その提言を作り上げるプロセスを学習活動の主軸に据えた。実際に生徒に示した目標と学習内容は以下の通りである。

### (2) 目標

- ・社会にとって意義ある問いを立て、それに対して何らかのアクションを起こすことができる。（→パーソナルプロジェクト、探究的活動の経験がもとになる。）
- ・母語でも外国語（主として英語だが、第2外国語等も含む）でも、異なる文化、背景を持つ他者と自分たちの社会の「課題」について対話し、相互協力体制を築くことができる。（→プレゼンテーション・ディスカッション他様々な場面でのコミュニケーションの経験がもとになる。）

### (3) 学習内容

- ・自分の進路を考えるに際し、様々な現実社会の事象・問題と関連づけて考える機会を持つ

(企業訪問・社会人講話など)。

- ・より現実的な社会の諸問題・諸相に触れる（フィールドワーク・社会人講話・時事問題についての調査・討論など）。
- ・校内・校外の人々との討論
- ・国際6のまとめとしての小論文やアクションプランの作成
  - 自分の興味関心のある分野や課題と社会との関わりを見つけ出す。
  - 志望や進路をあらためて考える機会とする。
  - 書いた文章を審査・査読される機会を持ち、「他者」に読まれることを意識する。
  - 社会的な課題を設定し、自分たちにできることやこれからの社会で取り組まねばならないことを「提言」としてまとめ、政府・企業などに送る。

#### 4. 「国際教養」の体系化と整備

さて、従来、この「国際5」と「国際6」は、上記のようにそれぞれ第5、6学年における探求活動として、同時間帯（水曜日の5限、4年生PPも同時間）に展開していた。しかし、パーソナルプロジェクトの提出期限の前倒しによって、この国際5・6もまた、そのあり方と運営方法を見直す必要が生じた。

今までのパーソナルプロジェクト・国際5・国際6の活動については、それなりの学習効果も見られはしが、課題も多く残されていた。例年挙げられる課題としては、

- ・PPの提出作品の質が必ずしも高くない。
- ・生徒のPPの活動に対して、担当者による専門的なアドバイスをすることが禁じられているため、十分なサポートができない。
- ・国際5の活動はパーソナルプロジェクトの経験が、国際6の活動はパーソナルプロジェクトおよび国際5の経験がもとになっているはずだが、実際にはそうになっていない生徒が少なくない。
- ・国際6の提言書（論文）について、書き方や引用の仕方など、一から指導しなければならず、担当教員の負担が大きい割に、提出された論文の質が必ずしも高くない。
- ・国際6は学年担任団で運営・指導するため、アドバイスできる指導内容に限界があり、生徒の要求に応えられない場合も多くある。

など、毎年課題として挙げられるものの、なかなか改善できない状態が続いていた。これは詰まるどころ、やる気のある生徒は放っておいても主体的に活動するが、やる気のない生徒は時間をもてあまして1年間を終えてしまう、という、どの教科でもある根本的な問題に帰着するところでもある。

そこで、今年度、パーソナルプロジェクトの提出時期変更を契機に、以下のような大きな改変と整備を行い、生徒の活動意欲の動機づけを図った。

まず、第3学年でのPPPをなくした。実際には、「PPP」という名称をなくし、1年次から3年次にかけて、長い期間を使って従来のPPPで設定していたねらいを達成できるよう、枠組みを再構成した。これはつまり、パーソナルプロジェクトをMYPの集大成と位置付け、1～3年次における国際教養の学習を、パーソナルプロジェクトを完成させるためのスキルを身に付ける時間とする、ということでもある。また、それに伴い、沖縄ワークキャンプの位置づけを、「内なる問いの顕在化」を図るものとし、従来はPPPのゴールであったワークキャンプを、PP

のスタートとなるようなイメージで捉え直した。

また、学年ごとに活動していた国際5・6を、学年の枠を取り払って「課題研究」（5年生は「課題研究Ⅰ」、6年生は「課題研究Ⅱ」）とし、20講座を開設して、二つの学年が同時間（水曜5限）に学年の枠を越えて各講座に分かれ、探求活動をできるようにした。

PPでは原則として担当者が担当生徒に専門的なアドバイスをしてはならないため、生徒が専門的なアドバイスを受けられるよう、5・6年の「課題研究」への参加を限定的に認めた。さらに、PPを終えた4年生がスムーズに「課題研究」に取り組めるよう、4年次10月からの活動を「課題研究Ⅰ」とし、5・6年生の課題研究と同時間帯に設定されていることから、5・6年生と一緒に探求活動ができる機会を設けた。

大きな再編としては以上のようなことを行ったが、その枠組みとしては、以下のようにまとめることができる。

前期課程は1年から3年にかけてPPを完成させるためのスキルを身に付け、4年次のPPに取り組む。つまり、1年4月～4年9月までが大きなまとまりとなる。

後期課程は、従来は学年ごとに4月から始めて3月に終了するところを、4年次の10月～5年次の12月までを「課題研究Ⅰ」、5年次の1月～6年次の12月までを「課題研究Ⅱ」とする。つまり、年度を跨いでの活動となる。

このような枠組みを設定することによって、生徒たちが、各自設定したテーマについて、より深い探求活動をすることが期待できるが、その一方で、例えば年度が変わるときに担当者や講座の変更が生じたりすることなど、解決しなければならない問題も多くある。特に今年度は移行期であり、想定していなかった課題も顕在化した。それらについて一つ一つ解決していき、次年度以降の活動をより良いものにしていく必要がある。

#### Abstract

In 2012, our own learning area of “International Liberal Studies” started offering all grades from grade 1 to grade 6. On the basis of accumulation of actual practice in each year, in addition to improvements and developments after the establishment of the school, activities of time of international liberal studies in each academic year were gradually becoming stable in terms of establishment and implementation of “science and mathematics exploration” (1<sup>st</sup> year), “Pre Personal Project” (3<sup>rd</sup> year), “Personal Project” (4<sup>th</sup> year), “International 5” (5<sup>th</sup> year), “International 6” (6<sup>th</sup> year), and “Workcamp” (1<sup>st</sup>, 3<sup>rd</sup>, and 5<sup>th</sup> year). However, as the submission of the yearly personal project in 4<sup>th</sup> year changed to September from January, several changes were required such as, positioning of workcamp and Pre Personal Project in 3<sup>rd</sup> year, and ideal form of International 5 and 6 in 5<sup>th</sup> and 6<sup>th</sup> year.